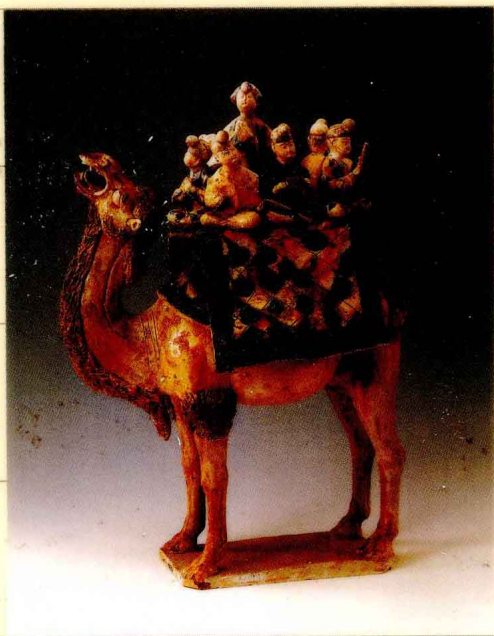


山口博



シルクロードから大和へ

万葉集の誕生と大陸文化



万葉集の誕生と大陸文化——シルクロードから大和へ

初版発行 ● 平成八年九月三十日

著者 ● 山口博

発行者 ● 角川歴彦

発行所 ● 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二二三 郵便番号二三 振替〇三〇九一五〇〇八
電話 営業〇三 三三六八三一 編集〇三 三三六八五五

印刷所 ● 横山印刷株式会社 製本所 ● 株式会社宮田製本所

落丁・乱丁本はご面倒でも小社角川ブック・サービス宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

万葉集の誕生と大陸文化

シルクロードから大和へ

山口 博



角川選書

273

万葉集の誕生と大陸文化——シルクロードから大和へ
目次

プロローグ 大伴家持の望郷歌

9

渭水のほとりにて／楊柳を手折りて歌う／更に西、ソグディアナへ

一 シルクロードの彼方から

19

I 山上憶良の見た馬上楽

20

サマルカンドの酷寒水掛け踊り／大唐皇帝讃歌の馬上楽／日本の雨乞い舞楽

II 枝咋い持ちて鳴く鶯

26

アフラシヤブ丘壁画の咋鳥文／唐高官のトップモード／奈良朝流行の咋鳥文／枝咋い持ちて鳴く鶯／戯れ歌歌人の咋鳥文／梓を手に舞う池神の力士舞

III 柘の枝の流れ来る吉野川

44

大唐の西域支配／石国の柘枝舞／吉野の柘枝説話

IV 四の目さえある双六の采

53

ソグディアナのダイス／双六の采の歌を作る男／奈良朝の双六禁止令／双六殺人事件
磯の上のツママを見れば

62

ツママはタブの木／能登の神木／東アジアの生命の樹／生命復活のシンボル／生命の樹
と動物／ユーラシアから藤の木古墳へ／日本列島の基層思想

VI 桃の花の下照る道の少女

76

二人の桃下の美女／西域に樹下美人を求めて／樹下美人の来た道／豊穡多産のシンボル／樹下美人の文学

VII 寺井の上のカタカゴの花 90

寺井のカタカゴ／山振の立ち儀う山清水／磯の上に生うる馬酔木／蘇りの水と生命の樹

VIII シルクロードとの交流 101

二 長安巷響 105

I 失意の留学僧弁正 106

本郷日本を憶う／「折楊柳」に寄せる望郷の念／離別を傷む「関山の月」／馬上の琴歌「昭君怨」／絵解き「王昭君」／弁正悲哀

II 山上憶良と長安の風僧 120

長安街頭の風僧王梵志と山上憶良／「貧窮問答歌」と「貧窮田舎漢」／貧窮の直視／貧民逃亡の世／仏・儒・道の三教同一の思想／家族を歌う／子は掌中の珠／金銀宝玉の否定／老醜無惨

III 艶情小説の季節 140

絵解き「遊仙窟」／遣唐使、金宝で購う『遊仙窟』／ダンディに『遊仙窟』を借用／もてはやした国と捨て去った国／海彼の風流を真似て／神仏の加護による『遊仙窟』伝来

IV 日中防人の怨嗟の声 151

大唐の戦争詩／大唐戦乱の時代／厭戦詩の盛行／大唐動乱下の遣唐使／遣唐使判官布勢人主、防人部領使となる／なぜ防人歌を収集したのか／王者、詩を采りて風俗を知る／防人歌と辺塞詩

V 三者三様のカルチャーショック 169

三 辺塞越中国の大伴家持 173

I 国際化の中の大伴家持 174

大伴家持の国際的カラー

II 遠の朝廷越中国 178

越中国の能登併合／越中国は遠の朝廷

III 帷幄の裏の大伴家持 182

大伴家持の「ますらを」意識／帷幄の裏に臥す／蓬体の身／デラシネ予見／流転する家

持銅像／発憤著書説

IV 大伴家持の辺塞志向 192

兵革苦辛の辞／春遅い越中の風土／辺塞越中の月／西塞の父、北塞の子

V 大伴家持の辺塞詩 200

厭戦と好戦の狭間／もののふの家／辺塞詩と防人歌／辺境の文化／大伴家持の辺塞詩

VI ペルシア製一枚の銀皿 218

四 《万葉集》誕生 223

I 『万葉集』成り立ちの不思議さ 224

雑多な分類／各巻々の編者たち／編者の「侍臣」とは誰か／『万葉集』の編纂意識

II 《万葉集》誕生 234

現『万葉集』の原形部分／《万葉集》の増補・脱落／《万葉集》はいつ誕生したか／誕生時の東アジア国際状況／《万葉集》は王家の歌集／標目における外交詔書用語の使用／唐王朝の国際感覚／なぜ舒明歌か／なぜ巻頭に雄略歌か／企画あるいは編纂者は誰か

III 「万葉」という歌集の名 258

「万葉」の意／青銅器銘文の「万葉」／「万葉」という言葉の渡来

エピソード 《万葉集》はなぜ作られたのか 265

参考文献一覧 270

あとがき 273

プロローグ 大伴家持の望郷歌

渭水のほとりにて

「あらっ！ 柳の蘗かすろだわ」

「まあ、ほんと！」

秋十一月、中国は西安郊外にある渭水いすいのほとりに、歓声が上がる。

一九九五年十一月三日から五日まで、西安の陝西省歴史博物館で、中国初の万葉文化展を主催した現代万葉の会一行は、開催期間の合間を縫って秦の始皇帝が都した咸陽かんようの街の見学に出かける。

車を渭水のほとりに留める。昔、西の方に旅立つ人と見送る人々が別れた河である。河辺遙かに柳の並木が続く。トラックなど車が行きかい、私たちを昔に引き戻すすがは何もないが、車の舞い上げる砂塵がかえって唐詩人王維かういの「渭城いじょうの長雨輕塵を霑うるおす」の気分を味わわせてくれる。この辺りが渭城であろう。

渭城の長雨輕塵を霑す 客舎青々柳色新たなり 君に勧む更に尽くせ一杯の酒を 西の方陽関
を出づれば故人なからん

長安の東の灊橋はきうは東へ旅立つ人との別れの橋、西は渭橋。漢人の著作といわれている『三輔黃圖さんぽくわう』巻六の橋の条によると、漢人は旅立つ人を送つてこの灊橋に至ると、柳を贈つて別れた。そのため「灊陵折柳」という言葉が生まれたという。最近、唐時代の灊橋の石造りの橋梁が発掘された。渭橋もまた同じである。旅立つ人との惜別の情もこの橋に至れば絶たれ、尽きねばならない。橋は、その名も情尽橋と名付けられていた。見送る人は、旅立つ人に河辺の柳を手折り、環にして贈つた。唐の雍陶ゆうたうは、橋の名も折柳橋と改めたという。友人を見送り別れる王維の詩の「柳色」には、もちろん折柳の思いが込められている。

楊柳を手折りて歌う

柳を環にしたのは、「環かん」は「還かん」に通じ、無事帰還の意を込めたのである。柳の枝はしなやかでたわめても折れず、枝先が枝元まで戻ること、故郷に戻るといふ願ひに通じた。又、楊柳の枝のしなやかに茂る様子を、

昔我れ往いにしとき 楊柳依依いたり

（『詩經』小雅・采薇さいひ）

と「依依」と表現したが、「依依」はまた、離れるに忍びない惜別の情の表現でもある。楊柳はまさに別離の情の具象であつた。

唐代において、柳の枝を折り、旅立つ人に贈る風習は、詩題「折楊柳」を生む。詩中に「折楊柳」「折楊」「折柳」などと歌われ、曲を伴い離別の曲となる。人を送る離別の曲は、送られる旅人

にとつては、そのまま望郷の曲であつた。

楊柳乱れて糸を成す 攀折す上春の時 葉密にして鳥飛ぶことを礙げられ 風輕くして花落つること遅し 城高くして短簫発す 林空しくして画角悲しむ 曲中別意無し 并せて久相思を為す

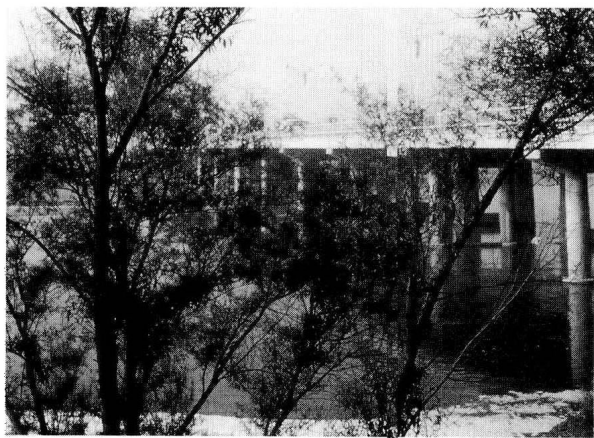
〔玉台新詠〕卷七

隋・唐に先立つ梁の簡文帝蕭綱の「折楊柳」である。短い簫の笛や色彩を施した角笛の哀音が響く辺塞での遅い春の中、柳を手折って望郷の念に駆られる様子を的確に歌う。故郷には愛人がいる。辺地に響く簫や角笛の曲は、どれも久しく会わない人进行「久相思」。故郷の女も男を思慕しているだろうか。

「柳を手折る」ということは、望郷の意だったので。皆さん、大伴家持が越中で詠んだ柳の歌を知っているでしょう。

春の日に張れる柳を取り持ちて見れば都の大路し思ほゆ (卷一九・四一四二)

ですね。天平勝宝二年(七五〇)三月、春の遅い越中でも、柳が芽吹き始めていたのです。題詞には、〈柳葉を攀ちて京師を思ふ〉とあります。〈攀〉は〈攀折す上春の時〉などと折楊柳の詩にあり、〈京師〉も漢語です。無意識のうちに都を意味する〈京師〉という言葉が出てくるのです。ですから題詞全体のニュアンスは漢詩的です。家持は漢詩の〈折楊柳〉を知っていて自分の望郷の念を歌に表したのです。越中へ下つて四年。渭水に思いを馳せ、柳の枝に望郷の念を託す家持を、とがめることはできませんね」



渭水（写真：著者）



柳の蘂を着けた渭水の子供（写真：著者）

私たちが、頭に柳の枝の環を巻いた子供たちを見たのは、その時である。確かにそれは柳の纏かすねである。感動に紅潮した顔でシャッターを押す人たち。私は、柳の纏の万葉歌を紹介した。

梅の花咲きたる園の青柳を 纏にしつつ遊び暮さな
(巻五・八二五)

これは大宰府官僚土氏と百村ももむらの梅花の宴の時の歌。

霜枯れの冬の柳は見る人の 纏にすべく萌えにけるかも
(巻一〇・一八四六)

「春の雑歌」の部にある作者不詳の歌。同じ巻十の「春の相聞」の部には、

大夫ますらおが伏し居嘆きて造りたる 垂り柳の纏せ吾妹わがも
(巻一〇・一九二四)

という、恋の歌がある。

大伴家持も越中で、

君ゆきが行もし久ひさにあらば梅柳 誰とともにか吾が纏かむ
(巻一九・四二三八)

と、恋の歌のようなものを作るが、相手は旅立つ下僚である。

しなざかる越の君らとかくしこそ 楊纏き楽しく遊ばめ
(巻一八・四〇七二)

も、家持が旅立つ国分寺の僧のための饞別の宴での歌である。

家持は橘諸兄邸たちばなののもろえでの宴で、

青柳の上枝ほつえ攀ち取り纏くは 君が屋戸やどにし千年ちとせほ寿くとそ
(巻一九・四二八九)

と歌うが、なぜ柳を纏にするかが分かる。

枝を土にさせば、芽吹くほど生命力の強い柳。その枝を頭に巻くことにより、生命力を身に感染

させようというのである。

一年中で、最も生命力の必要な季節は、年の初めの春。旧曆三月の祖先の墓に詣でる清明節には、柳を纏にする習慣が唐の時代からあった。ここ渭水の北岸で、唐の皇帝高宗が、旅立つ人に旅中サソリの害に遭わないように、柳を纏にさせたのが初めだという説もある。冬に枯れ春には蘇る柳の生命力に、邪悪を避ける靈力を認めていたからである。四世紀から六世紀の北魏の農業者『齊民要術』には「正月の朝、楊柳の枝を採り、戸口に著けば、百鬼家に入らず」とあるから、高宗以前からの民間習俗であつたのだろう。

韓琮^{かんそう}の「楊柳枝詞」は、旅立つ人が余りにも多く、灞橋の柳の枝が長く伸びないままに手折られる様を、

灞陵の原上離別多し 長条の地を払つて垂るること少なり

と詠んだが、渭橋とても同じであつただろう。

中国人ガイドも、柳の纏の記憶を話してくれた。

「子供の時には、何も分からずに頭に巻いて遊んでいましたが、勉強するようになって、その理由が分かりました」

「春の日に張れる柳を」と歌った家持も、手にした柳を纏にして、生命力を身に感染させたのだろうか。家持の享年は七十歳近くであつた。

旅行者のほとんど立ち止まらない渭水で駐車したかゝがあつた。現代万葉の会の人たちは、机上

で『万葉集』の文字を追うだけでは味わえない歌の深奥を、そして、万葉歌人がいかに海^{かい}彼の思想を受けていたかを、都西安とシルクロードを断ち切る渭水のほとりでは、ストレートに納得できたのである。

更に西、ソグディアナへ

「西安と奈良の都の間は、およそ直線距離にして二五〇〇キロ。日本列島の北の端から南の端に相当します。遣唐使は飛行機で行ったわけではないですから、大きく迂回します。倍の距離でしょう。しかも海山を隔てています。そんなに離れていても、渭水の折楊柳や柳の蘊の思想が万葉歌に影響しているのです。」

西安と奈良などは近いほうです。万葉の歌には、三世紀から六世紀にわたって今のイランにあったササン朝ペルシア、それよりは東のアラル海に近いウズベキスタン共和国のサマルカンドやタシケントなどの影響が見られるのです」

「先生、万葉の人たちは、そんな遠くの文化が自分たちの思想の中に流れていることを、知っていたのですか」

「中国の思想文化なら、意識したでしょうが、イランやウズベキスタンは漠然と「胡^こ」という意識でしょうね。長安にはペルシア人はかなりいましたし、奈良の都にも来ていましたから。波斯^は人^{じん}というのがペルシア人のことです。」